令和８年度
第17回医療安全やまがたフォーラム
テーマ『ＡＩとバディを組む医療』

日　　時　12月19日（土）13：30～16：00（受付13：00～）
会　　場　山形県看護協会会館　３階　第１研修室
（〒990-2473　山形市松栄一丁目5-45
アルカディアソフトパーク山形内）
対　　象　医療従事者
申込方法　参加申込書等で所属する団体にお申込みください

参加費無料

基調講演
『医療者のための生成ＡＩ実践入門
－活用の基本、リスク管理、現場実装、今後の展望－』

歯科医師×生成ＡＩアドバイザー　渡部　準也　先生

シンポジウム
「医療機関でのＡＩ利用アイディアの共有」

【山形県医師会】
青木 倉揚 先生

【山形県薬剤師会】
渡邉 尚子 先生

【山形県臨床工学技士会】
笹生 貴之 先生

【山形県歯科医師会】
鈴木 克明 先生

【山形県看護協会】
佐藤 裕恵 先生

アルカディアソフトパーク山形



主催：一般社団法人山形県医師会
一般社団法人山形県歯科医師会
一般社団法人山形県薬剤師会
公益社団法人山形県看護協会
一般社団法人山形県臨床工学技士会

担当：山形県歯科医師会事務局
〒990-0031　山形市十日町二丁目4-35
TEL: 023-632-8020　FAX：023-631-7477

事前抄録

基調講演

歯科医師×生成ＡＩアドバイザー　渡部 準也 先生
（東京科学大学大学院 医歯学総合研究科 博士課程）

生成AIの利用は日本でも急速に広がっており、全国15～69歳を対象とした調査で利用率はすでに過半数に達している。医療者にとっても一部の人だけが使う技術ではなく、情報整理、資料作成、教育、業務改善を支援する身近な道具になりつつある。これまでの生成AIは、チャット画面で質問し、文章作成や情報整理を手伝ってもらう、「相談相手」としての利用が中心であった。しかし近年は、目的に応じて情報を整理し、作業の手順を組み立て、実際の業務を補助するAIエージェントへと発展しつつある。生成AIは、単に答えを返す道具から、医療現場の業務を支える実践的な補助者へと役割を広げ始めている。一方で、医療現場で生成AIを使うには、便利さだけでなく安全性への理解が欠かせない。AIは誤った内容を自然な文章で出力することがあり、患者情報や院内機密を入力すれば情報漏えいのリスクが生じる。加えて、著作権、出力内容の確認責任、クラウドサービス利用時のデータ管理など、医療安全の観点から整理すべき論点も多い。

本講演では、生成AIをこれから活用していく方にも分かりやすく、基本的な仕組み、得意・不得意、医療現場での活用の考え方を解説する。さらに、歯科医療での実践例も交えながら、どこから始めればよいか、どのようなリスクがあり、どのような対策が必要か、院内でどのようにルールを整えるべきかを整理する。あわせて、カスタムAIツールやAIエージェントの展望にも触れ、医療者が生成AIを過信せず、過度に恐れず、安全に「業務のバディ」として活用するための視点を共有する。

シンポジウム

・山形県医師会・青木 倉揚 先生（山形済生病院 小児科）

『「山形県版AI小児救急チャットボット」の実績と課題』

家庭における小児救急相談サービスを目的として「山形県版AI小児救急チャットボット」を作成し、2026年2月から運用している。実績や、直面した課題について共有し、今後の展望について述べたい。

・山形県歯科医師会・鈴木 克明 先生（山形県歯科医師会 医療管理常任委員）

『歯科医院における臨床に役立つAI活用術』

歯科医院での生成AIの活用について、実際の使用例を紹介します。薬の飲み合わせの確認や患者への説明、診療に必要な情報の整理など、日常の臨床でAIをどのように活用できるのか、具体例を交えてお話しします。

・山形県薬剤師会・渡邉 尚子 先生（山形県薬剤師会 常務理事）

『薬局におけるAI活用の現状報告 ーAI薬歴を中心としてー』

薬局業務の各所にAIが製品として入り始めている。本発表では、服薬指導の会話から薬歴（薬局版の診療録）の下書きを生成するＡＩ薬歴を中心に、その仕組みと普及の現在地、現場で守るべき運用上の担保を報告する。

・山形県看護協会・佐藤 裕恵 先生（医療法人徳洲会 新庄徳洲会病院 看護部長）

『生成AIを活用した看護サマリー導入の現状と課題』

当院では2026年1月よりAI看護サマリーを導入し、看護師の記録業務の効率化と負担軽減を図った。導入後、情報整理や文章作成の時間短縮が期待される一方、生成内容の正確性確認や看護師による最終判断などの課題もあるため現状を報告する。

・山形県臨床工学技士会・笹生 貴之 先生（山形大学医学部附属病院 臨床工学部）

『医療機器管理と生成AI　ー個人開発の経験から考える活用例ー』

LLMを用いた個人開発では、要件定義やセキュリティ、運用に課題を感じた。本発表では、開発経験を振り返り、医療機器管理システムに蓄積された故障・呼び出し履歴の自由記載を分類する活用案を紹介する。